

『東方』三〇七号より

新たな社会史研究に向けて

田中比呂志(東京学芸大学)

すでに常套句となつてしまった感否めないが、中国の沿海都市部の経済発展は極めて著しい。先日、ある会議に参加するために大連を訪問する機会を得たが、高層ビルが林立し、さらにまた建設中のビルが数多あるのを見て、あらためてその感を深くした。それらの風景を受講学生に見せたところ、「自分が思っていた以上に中国は発展しているのがわかった」とか「中国は今、急速に発展していると聞いていたけど、写真を見てみてすごさが分かった」といった感想が少なからず寄せられた。しかしながら、周知の如く、発展する都市の風景だけが現在の中国を象徴しているわけではない。たとえば「三農問題」という言葉によって知られるように、中国の内陸部農村は今なお未解決の問題が山積しているのである。昨夏、河南省の都市近郊の農村を瞥見する機会を得たが、およそ沿海部とは全く異なった様相が横たわっており、さらには、当地のある大学人の「(河南省は)どのように発展を探つていったらいいのかわからない」といった、なかばあきらめにも似た嘆き節すら耳にしたのであった。

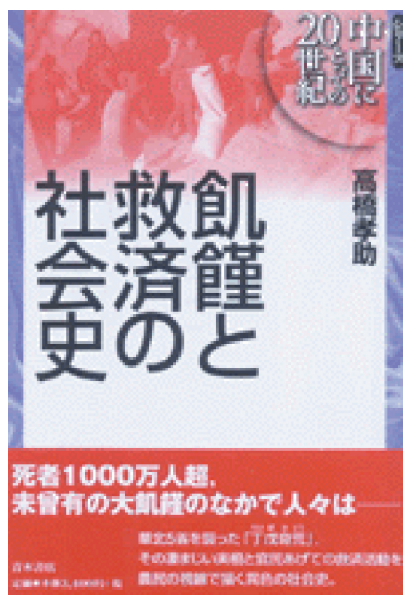
国土の広大な領域を占め、多くの人口を抱えてきた中国農村は、現代中国研究のフィールドだけでなく、歴史学研究の分野においても主要な研究対象であり続けてきた。無論、それぞれの時期による問題関心のあり方や研究手法、分析の対象は様々であり、それらはこれまでに不断に変化してきたと言えるだろう。かつて一九八〇年代初頭に至る

▶ トップページにもどる

高橋孝助著

『飢饉と救済の社会史』

四六判・三四六頁・青木書店・三、五七〇円



までの中国近現代史研究においては、地主佃戸(二田領主)制、抗租抗糧、減賦・減租等のキーワードで示されるような地主制研究、あるいは農民闘争史・革命史研究が非常に盛んであった。しかしながら、一九八〇年代初頭、上述のような研究動向はその方向を転ずることになった。その研究関心の変化自体は本書に先立つ高橋氏の論考においてすでに提示されていたが、本書はさらにそのような方向性を具体的に推し進めたものと言えるだろう。すなわち、本書は「従来の革命史とは異なる新たな中国像をもとめて探求をつづけてきた」(本書IV頁) 成果なのである。

本書の構成は次のとおりである。

序章 鄧拓『中国救荒史』をめぐる

第1章 大旱魃の襲来

第2章 江南と難民

第3章 慈善活動と飢饉救済

第4章 「荒政」の論理と方法——山西の場合

第5章 山東における留養局・撫教局と「贖田」論議

第6章 河南における「代贖局」

終章 黄土高原の近代——山西を例として

本書が直接に考察の対象としているのが、光緒二年（一八七六）からはじまったいわゆる「丁戊奇荒」に起因して悲惨を極めた華北五省（山東、直隸、河南、陝西、山西）の農村の惨状と、官民によるその救済についてである。この飢饉による犠牲者は九〇〇万から一三〇〇万人と推計されている（一四頁）。この人数そのものも大変な数字であると思われるが、本書を読み進めていくとそのような数字は早々に頭の中から消え失せてしまうことであろう。著者は記録され残された史料を丹念に搜索し、それをもとにして当時の状況を緻密に再構成しており、そうであるが故に、それを読む読者は知らず知らずのうちに凄惨を極めた華北農村の「風景」に引きずり込まれ、この上もなくリアルな悲惨さを「体験」させられてしまうからである。それは、すべてのものを売り尽くし、妻子すら売り、口に入るものならば何でも食い、死者すら喰らい、子を取り換えて喰らい、生きている人間さえ喰らい、やがては自分も他者やオオカミに喰われてしまう世界であり、人間がただ生きることを探るなかで、一個の生物と化す世界である。

しかしながら、著者の目的はただ単にそのような異様な世界を描くことに置かれてはいない。著者の筆はやがて、官による救済と並行して、地獄絵図と化した華北農村の人々を救済するために活動を開始した江南の「善士」らに向けられる。上海を中心として救済運動の組織化が進めら

▶ トップページにもどる

れ、その中核にいたのは李金鏞、胡光墉、唐廷枢や徐潤といった「新式商人」——時には買弁とも称された——らであり、彼らを救済活動に立ち上がらせたのが『申報』によってもたらされた情報であったことは、大変に興味深い。「善士」らの活動は、被災民への銭や粥、衣服、薬の供与、売られた人間や土地の回贖、死者の埋葬、難民の収容と故郷への送還、生計の資を得させるための職業訓練など、様々な分野に及んだことがわかるのである。読者の中には、覚えずして救済する者の視線に立つて本書を読み進める（た）読者もいるかもしれない。江南の人的ネットワークが、江南地域を超えて隣接する華北地区に及んでいたことは、地域と地域とのヨコのつながりを検討するための材料を提供しているとと言えるだろう。江南地域社会史に関心を持つ者として、江南地域が他地域と、どのようにつながっているかが見え、極めて興味深く思った次第であった。

さらに読み進めていくと、やがて我々は飢饉の被害を深刻化させたものが、ただ単に天災だけでないこと——人災の介在——に気づかされる。本書で明らかにされているのは山西省の事例である。一つは同省におけるケシ栽培であり、一つは食糧輸送のためのインフラの不備であった。前者は、農民にとってケシ栽培が穀物栽培よりもはるかに利益をもたらしたことから、同省においては、大飢饉襲来以前から穀物生産を圧迫していたのだという。また、後者は隣省からの食糧供給を十全に行き渡らすことを阻害した輸送路の未整備問題であった。これらは他の四省に同様に見いだすことのできる問題ではないのかもしれない。しかしながら、もう少し抽象度を上げて考えてみると、それらが地域社会の内的構造、あるいは地域社会の経済構造に深く根ざしている問題であることに気づかされる次第である。

それでは、本書の目指した「従来の革命史とは異なる新たな中国像」は、如何なる像を結んだのであろうか。筆者はそれを農民自身の生への欲求から読み解き、「農民の悲惨な姿は、日常への復帰を望みあえぎ努力をする農民の姿と表裏をなすものであり」、それは個別華北農民にだけ見いだされるものではなく、「中国農民の全体像を構成するもの」（三二二頁）と、普遍性の存在を提示する。かくの如き視角は、民衆や農民らが構成する基層社会を分析するのに有益な視点であろう。

ただ、本書がそうだというわけではないのだが、民衆史研究に関しては、次のような注意も必要であろう。『江南鉄涙図』『河南奇荒鉄涙図』は難民救済を意図して知識人らが作成したものであった。一般的に言えば、民衆や農民らは自らのことを文字等によって記録を残すことはほとんど無いであろうから、文献を用いて研究しようとする場合、どうしても官制文書や知識人らの残した記録に頼らざるを得ない。しかしながら、当然ながら記録を残す側の視線も記録の仕方にバイアスを与えるおそれがある。本書で検討の対象とされたこの二枚の『鉄涙図』の場合、これらが描かれた目的は、災厄による農民・民衆の苦しみを表わし、「善士」による救済を喚起することであった。無論、著者も十分承知のとおり、「涙を落とすような哀れな姿が描かれ」（三二九頁）のである。このように本書においては、他の文献史料を用いることにより、冷静に検討が進められているのである。

「あとがき」において、著者は本研究の出発点を記している。それは本書の出版の四半世紀以上前の、『江南鉄涙図』および『河南奇荒鉄涙図』との邂逅であったという。しかしながら「史料として活用する方法を見いだせなかつ

トップページにもどる

た」という。それから二十余年、二つの『鉄涙図』を文献史料によって丹念に跡づけるという手法で分析・検討が進められ、その成果が本書として結実した。明らかにされてみれば、その手法は大変にオーソドックスな手法であり、特別な知見や技術が必要とされるわけではないことがわかる。だが、それは「コロンブスの卵」というものである。無論、これだけがオンリー・ワンではないにせよ、絵画史料の使用について、一つの取り扱い方法を提示したことは間違いない。これまた本書のメリットの一つであろう。

近年、学問研究の場にも成果主義が様々に持ち込まれるようになってきた。しかしながら、じつくりとあたためられ、こつこつとした地道な作業の上に結実した本書の豊かな世界を前にすると、成果主義の無意味さがますます露わになったと思うのは、なにも評者だけではないであろう。

【注】

①高橋孝助「郷居」の「善士」と在地地主層——江蘇無錫・金櫃県の場合『近きに在りて』二号、一九八二年。